



平成27年 4月15日

2・3面	公民館の歴史
4面	松川の戦争遺跡の講演を聞いて
5面	町史探訪の会
6面	青年の家だより
7面	スポーツ・情報
8面	なかまたち 高齢者講座・短歌 声・視点・ペンペン草



「春の積雪」(上片桐)

4月8日、時期外れの降雪がありました。このところの暖かさで芽を出した果樹の新芽が、寒さに凍えているようでした。

くだものの里松川に、あつて
ない物、それは美味しいりんご
と、それを使った加工品の文化。
私達りんごを生産し販売をして
いますと、お客さんから「アッ
プルパイは無いの？シードルは
無いの？」という声を多々耳に
します。(シードルとは発泡性
のワインの事)

そうなんです。我々は日本一
美味しい果物を育てているのに
それを使った究極のスウィーツ
なり、果実酒を愛好す
るという食文化を持ち
合わせていない事に気
付きました。もちろん、
地元には、全国にも名
の知れた美味しいワイ
ナリーもあるのに活か
せてない。

新しい食の文化を作
るには、まずは地元の
住民に愛して貰わな
ければ、何より生産者
の個性の出るオリジ
ナルワインを作らな
ければ…。

そんな思いを同じくする仲間
達で立ち上げたのが「南信州松
川りんごワイン振興会」です。
自分の家で育てた「りんご」を
原料に、品種の配合、加工にす
る時の熟度・糖度見極め等々、
生産者ならではの『こだわり』
を持って委託醸造。
農家5軒で、6種類のりんご
ワインが完成しました。

主張 目標は統一ブランド

「松川シードル」

場りんごワインを学ん
で来られた「近藤正来氏」
を講師に呼んでの講演会・
試飲会・フェルクロレ
の音楽ライブパーティー
と、約80名の参加者と共
に楽しみました。参加者
の方々の反応も非常に良
く、りんごワインの持つ
可能性に、強く手応えを
感じる事に…。これから
の活動目標は、統一ブラ
ンドの「松川シードル」
の製造。それをひっさげ
て、全国区へ名乗りを上
げ、国際的コンテストでの金賞
受賞、また、そのワインを求め
て、当町へ世界中から、観光客
が来てくれる様になる事。相乗
効果で美味しいスウィーツ屋さ
んの出店が相次ぐ事、等々。夢
は無限に広がる「りんごワイン
振興会」です。

南信州松川りんごワイン振興会

公民館の歴史①

～公民館建設当時を振り返る～

現公民館は本年度中に取り壊され、新公民館の改築が開始されます。昭和46年（1971）完成し、以後、今日に至るまで44年余町民の皆さんに使用されてきました。

現公民館を閉じるに当たり、公民館の歩みを振り返ってみたいと思います。第1回は、建設当時です。

グラウンド・体育館も併設された県内に例をみない屈指の公民館

松川町公民館は昭和31年度に発足し、組織づくりが行われ、だんだん町公民館としての機能を果たすようになってきました。そんな流れの中で、「大勢の人が一堂に会することができるような公民館が欲しい」という声があがるようになりしました。

40年代に入ると要望が高まり、一気に建設に向かっていきます。昭和44年2月に議会が決議し、2年後には完成をみています。2年間に、議会の建設委員会が規模、工期等を審議し、それを受け設計依頼、用地取得、入札、工事、

そして、完成と驚くべき早さで進みました。

新公民館は、公民館活動の拠点であることになり、はありま



現公民館の建築中

公民館建設に伴い、図書室も整備され、また、体育館（講堂）、グラウンドも併設されました。当時、町の文化・運動の中枢センターの機能をもつ、県内では例をみない屈指のものでした。

若者を中心に幅広く様々な活用された公民館

館報106号（昭和46年5月発行）に「活用されている福祉センター」という小見出しで当時の様子が紹介されています。

本年1月よりほとんど毎日何かの会合でセンターが使われている。その中には公民館の学習会、役場関係の諸会合、乳児検診や注射なども行われている。

青年団の活動はほとんど毎夜のように熱心に続けられていて、婦人会関係も料理教室、学習会、若妻会等、幅広く利用されている。

今まで大勢の人が一堂に会する場所がなかったが、福祉センターができあがりあらゆる会合ができるようになった。松川町の青年が

町民の方々が一堂に会する場所ができた喜びと共に、住民のみなさんがいきいきと活動する姿が書かれています。「毎夜のように」「ほとんど毎日」という言葉から、よく使用されている状況も分かります。また、健康診断、会合、集会そして結婚式など様々な使用されていたこともわかります。

「青年団」「若妻会」「若者」「結婚式」などの言葉から、公民館が多くの若者にとって集い、楽しむ交流、懇親の場になっていたのではないかと

一堂に会して歌ったり話したりして親睦を深めた青年祭も3月に開かれた。

また、結婚式場として利用され、5月までに8組の式が行われ、木の香も新しい式場から幸せなスタートを切っている。

体育館の設備も整っており、毎夜若者がボールを手にして身体をきたえている。

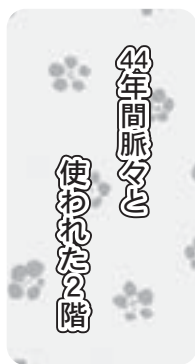
このように福祉センターは町民の中心として活発に利用されている…



かつての体育館（講堂）で行われた結婚式

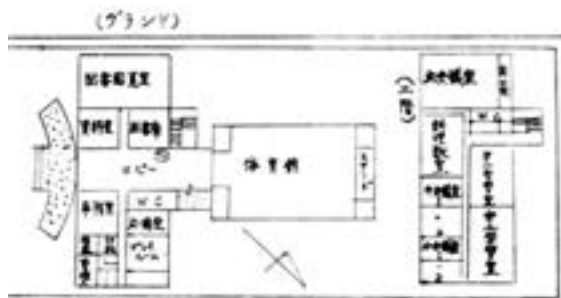
思います。

団塊世代がちょうど若者の頃、グラウンド、体育館が併設された立派な公民館が建設されたことが、他に誇れる松川町の公民館活動の発展、充実のきっかけになったのではないかと思います。



当時の平面図と現在の様子とを比べてみると、1階は大幅に変化しています。図書室がパソコン教室に、資料室が編集部等本館部員の部室に、プレイルームが印刷室に、管理入室・宿直室が教育支援室に変わっています。

住民のニーズに応じて改築が行われましたが、経済の高度成長に伴う豊かさ、産業・科学技術の進展、また、社会教育・生涯学習の充実等、戦後日本の歩みの縮図を感じます。



建設当時の平面図

しかし、2階

は大会議室・

学習室・会議室等は当時と変わりません。

44年間、集会、学習、講座、習い事等に脈々と使用されてきました。

時代の変遷はあっても、住民の皆さんの、学び、集い、つながるとい

う公民館活動が、2階の各部屋で途切れることなく力強く続けられました。

思い出の一端

元教育長 北原 衛

(昭和39年～50年公民館主事)

公民館より現在の中央公民館建設の頃のことにつき書いてほしいとの連絡があり、40年以上も前のことなので随分迷いましたが当時とはだいぶ変わっているところも施設にもあるので、思い出すことや活動面の幾つかの事柄について書いてみることにしました。

昭和40年頃の公民館活動の活発化とともにそれらの拠点となる公民館の建設の要望が町全体の願いとなってきた、昭和44年には決議され名称は松川町地区福祉センター(国補助金対象にする為)として昭和46年に中央公民館が竣工された。開館当時は土足のまま入館できた管理棟(現在はコンピューター室となつている図書館、書庫や資料室を併設)と管理棟と連結している体育館兼講堂(現在は図書館、資料館がある場所)更には福祉センターグラウンドとテニスコート(現在はその土地に昭和61年3月竣工の町民体育館がある)が管理棟南側に造成され後に当時としては近隣ではまだなかった夜間照明も昭和46年11月につき、夜間も一般開放され活用されるようになった。このように名実ともに青空公民館活動と云われた頃から充実した公民館となり様々な学習活動、文化活動、体育活動、更には自治学習やサークル活動等々の拠点とされるようになった。

それまでの旧公民館は大島小学校北校舎の再使用で、その後中央小学校建築に伴い改造されたもので平屋で約200㎡の規模であった。その頃は教育委員会事務局は旧松川町役場2階の西側の1室にあり、公民館他の使用申し込みはそこで行っていたので使用される方々には大変不便をおかけしていましたが、現在のようにするには後々の改善改修の結果である。又旧公民館は和室二間の広間と奥の図書館や公使室等であった。

図書館は部員の皆さんが当番で貸出しをしていた。更に当

番でも県下の先鞭をきって自動車による巡回文庫貸出が行われており、その頃は建設課の4トントラックに立てることが出来る箱形の本棚に500冊程本を積み停車場所に部員の方が居て貸し出しを行っていました。その後貸し出し軽自動車、更には現在の専用車へと改善されてきた。

ところで思い出される体育活動の一つとして各分館の事業として行われていた卓球大会を体育館兼講堂で町大会として行われるようになり、地区分館の卓球台をお借りして行われ前日の準備と翌日の片付けは非常に重い木製の卓球台の運びこみや返却は重労働で、部長指示のもと全部員が4トントラックからの積み下ろし体もくたくたになって大会を支えた姿は今でもはつきりと思い出されます。

次に、現在松川町のあらゆる面の第一線で活躍されている方々の青年当時の学習の場としての青年学級のこと鮮やかに思い浮かべられます。図書室などで毎週火曜日夜欠かさずに集まり意欲的な学習討論がなされていた。農政問題、近代歴史等のテキスト学習や環境問題、健康問題や町の地域問題等々幅広く熱心に取り組みがなされていた。

その頃町を通過する中央自動車道の路線発表があり学級生の大きな学習課題となり、開通された場合に理想論だけでなく町の将来への功罪や地域変貌などについて学習することとなり、既に開通していた春日井インター視察と周辺の民家を尋ね聞きとり調査を全員で行い以後それぞれが地方事務所や町役場などから統計実態を調査し詳しい資料により学習討論し、まだインター設置が決まっていなかったが通過するだけの高速道ではなく利用できるインターなどが必要ではないか等々の学習結果などや調査実態をまとめた調査集がつけられた。青年達の町の将来を思う意欲あるそんな学習に参加できたことを今でも尊い思い出として強烈に残っている。

当時の思い出としては、ほんの一部の一例について書いてみました。今後の公民館活動の充実発展を願ってやみませ

松川中学校1年生 平和学習

「松川の戦争遺跡」
の講演を聞いて

松川中学校では平和学習として、1年生は町に残る戦争に関する事柄や戦争体験者の話を聞き、2年生や3年生は松代大本営や広島、あるいは満蒙開拓について学習を深めているそうです。1年生の平和学習講演会に資料館では毎年招かれて、町に残る戦争遺跡として、少年たちが勤務した航空機監視施設の元大島防空監視哨や、塩倉に墜落した陸軍戦闘機と塩倉の婦人たちのお話を紹介しています。2月24日に行われた講演会後の3月5日、担当の先生より生徒さんの感想が送られてきました。「自分たちとたいして年の変わらない少年が航空機監視の任務に当たったこと」や、「14歳でも軍隊に志願できたこと」、「塩倉の婦人たちが、墜落死した戦闘機操縦員の供養を続けたこと」など、驚きや感動の気持ちで話を聞いていただけたことが綴ら

れています。ここにいくつか紹介させていただきます。(原文のまま)

◆航空機の監視施設があったことは知っていたけど監視壕といった地下までほられた監視施設だったのにはびっくりしました。きつと夜は暗くてこわかっただろうなと思います。また、生田の塩倉について落した戦闘機の話では、まず人を助けるのではなく、戦闘機を片づけて人は置いていつてしまったのには思いやりの心がないし、ひどいと思いました。実際体験した方、くわしく調べている方々に直接、本当に貴重なお話が聞けて良かったです。自分の思っていた以上にひどいことが行われていておどろきました。またお話を聞くと、体験した方々の悲しみや傷みが伝わってきて、改めて、戦争というものは2度と起こらないようにしたいし、私たちも伝えていけると良いと思いました。

(米山美空)

◆戦争は長野とは遠い存在だと思っていたが、塩倉に、飛行機がつかいらくしたし、飛行機監視所がある事を知り、私達の生活にも近い存在だという事が分かりました。塩倉に飛行機が落ちた時、戦争の人達は、飛行機だ

けを持って帰ったけれど、地元の人達はお墓を作り50年近くも、くようをし続けてきた事に、感動しました。戦争は兵隊さんだけでなく、国全体で戦争していた事が分かりました。

戦争は色々な人々をきずつけるから、絶対にやつてはいけないうことだと思えます。70年前といつても、つい最近の事なので、この事を忘れてはいけないう事がありました。戦争を体験した人々は、減ってきているので、少しでもいいからお話を聞けると良いです。日常でこのようなお話を聞ける事はあまりないので、今回の体験はとても貴重な物でした。二度と戦争を起こさないためにも、なぜこのよいうな事が起こったかや、今までの歴史を学んでいきたいと思っています。

(宮下きぬ子)

◆飛行機が武器として発達してきたこと、戦争に行きたいと思うような教育をされていたことがとてもびっくりした。飛行機が落ちた時、操縦していた人を火葬して、埋葬したこともびっくりしたけど、長い間供養していたことも、すごいと思った。原爆はしょうげきだったけど、他の空襲が見落とされがちなのが悲しいと思った。(栗原萌花)

◆航空機を監視する所の構造を

見て「なぜ地下室みたいな所があるのだろう」と疑問に思いました。そして地下の方が上空の音を聞きやすいことが分かってびっくりしました。印象に残っているのは塩倉に墜落した戦闘機の粉々になった破片は回収していったのに、パイロットの遺体を現地に残していったことです。

操縦者よりも戦闘機の方が大事だということに驚きました。遺体はバラバラになってしまっているのに操縦者の手はしっかりとハンドルをにぎっていたことを聞いて、すごいなと思いました。人の命よりも戦争の兵器のほうが大事ということが今日分かった。戦争はひどいと思いました。戦争の恐ろしさがよく分かりました。(遠藤久流美)

(遠藤久流美)

◆飛行機の監視を、私くらの年の子が昔していたのは知らなかったし、14才になると志願して少年兵になったというのにはおどろきました。あと1年してクラスの子が「少年兵になる！」と言いだすというのは、今だと信じられませんが。

塩倉の人々の思いやりは、とてもすごいと思いました。私は、これからは、塩倉の人々のように思いやりをもって『今』この時代に生きていくこと、平和だ

ということをしっかり考えて、

生活していきたい。(中平優芽)

◆今日の講演を聞いて第一に思ったのは戦争は誰にとつても辛いものだったということです。よくテレビや本などで「お国の為に」というセリフがありますが、果たして、そのぎせいは国の為になつていったのかと思いました。

(下沢真梨子)

◆戦争をしていたときは、飛行機が大切ですが武器にもなつたからといって、墜落死した澤田熊雄伍長を先に助けるのではなくて飛行機が大切だからって、こわれたぶひんだけをかいつゆうして行つただけでつらくしてしまつた人をみのがすのはひどい、いくら兵隊がたくさひんいると言っても、国のためにひつしになつてやつたのに、そのまましておくのはひどいと思う。戦争なんてやんなきゃこうなんかなかったのに。

(宮下友杠)

生徒の皆さんが感じられた感想が素直に綴られています。事前にしっかりと学習もされており、町の戦争遺跡に関心を持たれることはありがたいことです。いつまでもこうした「心」を持ち続け、平和の尊さを感じ続けていただきたいと思います。

酒井幸則



松川町がくだもの100周年を迎え、町史を読み進めて町の歴史を学ぶ町史探訪の会でも、果樹栽培の歴史を学んでいます。現在につながる果樹栽培が始まったのは大正4年のことです。しかし、その前に果樹が全く無かったわけではありません。

松川町史第三巻「松川町の歴史」の「第四章近世・第六節江戸時代の農業」の中に、生田の中山・峠・長峰柄山のりんごや桃が売られていたことが記されています。

現在栽培されているりんごは明治初年にアメリカから輸入されたものをもとに栽培を進めてきたもので、江戸時代のりんごはこれとは別に昔から日本にあった「和りんご」です。この和りんごも元々は平安時代に大陸から伝わったものが全国に広まり土着したものといわれていますが、明治以降に広まった現在のりんごと区別するために「和りんご」と呼ぶようになったそうです。

今はほとんど見られなくなつた和りんごですが、長野県北部の上水内郡飯綱町では、今も和りんごが栽培されています。その

和りんごは「高坂りんご」といい、飯綱町の天然記念物に指定されています。また飯綱町には、りんごの魅力を伝える「いろいろなアップルミュージアム」があり、高坂りんごをはじめたくさんのりんごの紹介や歴史などを知ることがができます。

江戸時代に中山などでとれたりんごは和りんごということになり、飯綱町の高坂りんごに近いものであったと想像されることから、町史探訪の会では3月24日にいろいろなアップルミュージアムを訪問し、高坂りんごを中心に日本のりんご栽培の歴史を学びました。

江戸時代に果樹が売られていたことや、ほかにも果樹栽培についての歴史はあります。こうした歴史は今の果樹100周年に直接つながるものにはなりませんでしたが、くだもの里として大切な歴史の一つではないでしょうか。



ミュージアムでは、世界のりんごを見ることができます

生涯教育のメッカ

松川青年の家だより (その四十二)

春休み工作教室

松川青年の家では、卒業式が終わって新学期が始まるまでの春休みに工作教室を実施しました。当日(3月22日)は、13名のご家族に参加していただき、竹や木など身近な材料でおもちゃを作ったりそれを使って遊んでもらったりしました。

ナイフで竹とんぼ

まず挑戦したおもちゃは竹を使った竹とんぼです。あらかじめ用意した幅1cm長さ10cmほどの竹をナイフで削ってプロペラを作りました。私たち大人が「危ないから気を付けて!」とか「指を切らないのだから、子どもたちはおっ



キリを使って穴あけ

かなびつくりでなかなか力が入りません。それでも、しばらくするとだんだんとコツをつかんできたのか、ナイフを握る手に力が入ってきて、削りカスがだんだんと大きくなり、プロペラも少しずつ薄くなりました。ある程度薄くなつたところで、中央に穴をあけ、紙やすりで磨いたり色をつけたりして竹とんぼが出来上がりました。早速、心棒を取り付けて飛ばしてみました。やや重たいため天井までは届かなかつたけれど自分の背よりも高く飛ばして喜んでいました。

本物の竹で竹馬作り

次に挑戦したのは太さ3〜5cmの竹に2枚の木の板を取り付けた竹馬です。これは紐で強く縛る作業が多かったのですが、大人の方ががんばつてもらいました。形は出来上がっても足を乗せる台が下がらないようにするのがとても大変でした。出来上がると、玄関前の駐車場で乗ってみました。初めはお母さんに竹馬を持ってもらつてやつと立てるくらいでしたが、一人のお母さんが竹馬に乗って歩いて見せるのと、子どもたちも負けじと頑

張りました。最後には、2〜3人の子どもが数歩歩くことができるようになりました。きつと家に帰ってから練習して今では乗れるようになってきていることと思います。



上手に乗れるよ

木の枝でパチンコ

最後に、木の叉を使い昔遊んだパチンコを作りました。あらかじめ用意した二股に分かれた木の枝をのこぎりで切り、骨組みを作りました。次に玉受けの皮の両側に穴をあけ、それぞれに太いゴムを通し、それを木の又の先に固定して出来上がりです。完成した子どもは木の玉を窓から外の森へ飛ばして出来具合や飛ばし方を確かめていました。みんなが出来上がったところで外に出て、遠くまで飛ばす競争をしたり離れたところに立てたペットボトルへ玉を当てたりするゲームをやりました。みんな玉を集めるのに忙しいくらい夢中になって遊びました。親子で楽しんだ春休みの一日でした。

春が来た!!

スポーツをし体もあたたか

矍鑠 (60歳以上)

弓道大会

3月7日(土)に町弓道場で矍鑠弓道大会(60歳以上)が開催されました。
結果は次のとおりです。

団体戦

優勝

鈴木 清重

山口 澄男

菅沼 昭彦

準優勝

南島 健

唐沢 徳

荒井 清

第3位

今井 勉

田畑 隆夫

笠原 武明

個人戦

優勝

中島 啓

2位

菅沼 昭彦

3位

松村 信男

4位

笠原 武明

(天龍村)
(豊丘村)
(高森町)
(松川町)
(阿智村)

第28回松川町ダブルスバトミントン大会

3月8日(日)に松川町民体育館で松川町ダブルスバトミントン大会が開催され、男子16チーム、女子11チームの参加がありました。
結果は次のとおりです。

男子がんばる

優勝

中村 祐也・杉山 文康

(福与)

準優勝

北林 大輝・北林 大輝

(体協)

第3位

今井 和芳・中塚 駿

(福与)

男子たのしむ

優勝

二村 和久・米山 正彦

(体協)

準優勝

ジャクソン・ラッジム

竹村 明浩(上片桐)

第3位

桜井 誠・細田 勲

(上片桐)

女子がんばる

優勝

中塚 真理子・松下 佳世

(福与)

準優勝

松上 霞・宮澤 真帆

(福与)

第3位

清水 菜芳・林 暁

(福与)

女子たのしむ

優勝

桑澤 優里・下井 千瑳

(ジュニア)

準優勝

桃沢 藤子・下澤 智子

(上片桐)

第3位

橋場 瑤子・小山 美月

(ジュニア)



まつかわ大学 第10期生募集

多彩な講師を招き、楽しみながら一緒に学んでみませんか!

第1講座 6月13日(土)

「農業ルネッサンス～不可能への挑戦」

講師：木村興農社 社長 木村秋則 氏

時間：10:00～12:00

第2講座 9月12日(土)

「がんの最新治療～がんはここまで治る!」

講師：昭和大学医学部 教授 佐々木康綱 氏(阿南町出身)

時間：13:00～15:00

第3講座 12月12日(土)

「“その人”らしく生きる～介護・看取りの現場から」

講師：UDヘルスケア研究所 所長 大澤智恵子 氏

時間：13:00～15:00

第4講座 2月6日(土)

「嬉しいことばが自分を変える」

講師：ことば磨き塾 主宰 村上信夫 氏

時間：13:00～15:00

- 入学金…年間1,500円(ただし、受講登録は松川町民のみとなります)
- 締切 5月11日(月)
- お問い合わせ先 中央公民館 電話36-2622

子どもソフトテニス入門教室を開きます

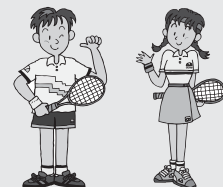
主催 松川町少年少女体操・スポーツ総合クラブ

日時 5月10日(日) 9:30～11:00 会場 松川北小体育館

参加費 一人200円(障害保険料、ラケット・ボール貸し出し、連絡費用)

申し込み締め切り 5月5日(日)

連絡先 自宅電話&FAX 0265-36-5728 川又一郎



なまなま今

子どもの影響で汗を流す週末の楽しみ

Red Stone★フットサルクラブ



金曜日の夜、中央小学校の体育館では活気のある声が飛び交っています。

昨年末に、少年サッカークラブのコーチ・親達で始められたフットサルクラブ、子どもだけでなく親もサッカーを楽しむという目的でスタートしました。子どもに影響されて参加した方、昔からサッカーをやっていた方、少年サッカークラブ出身の高校生、また親だけでなく子ども達も参加して、今では毎週20人程が集まって汗を流しています。



ウォーミングアップを行いチーム分けをし試合を行います。チームは初心者上級

者、年齢関係なく編成し、楽しみながらプレーしています。試合の待ち時間には話をしながら交流を深めたり、週末と言う事で、仕事疲れをフットサルで汗をかきリフレッシュしたりとそれぞれの楽しみ方が伝わってきました。

最初は人が集まるか不安だったと語ってくれた代表の福沢さんでしたが、今では自分のプレー時間が減ってしまう程人が集まり、チーム分けに苦労すること。今年1年練習し力をつけて、来年から大会へ参加していきたいと今後の抱負を語ってくれました。

たくさんのお色を楽しみました

第2回高齢者講座

「春の楽しいコンサート」尺八と鍵盤ハーモニカと世界の民族楽器」が3月12日に、町民体育館トレーニングルームで開かれました。

今回は、手作りの尺八や竹楽器を演奏されている地元生の遠藤健二さんと鍵盤ハーモニカ、民族楽器の夏秋文彦さんをお招きしました。当日は、冬の戻りで寒かつ

たのですが、大人、そして、中央小・北小の3年生、合わせて175名が来場され、移動席がいっぱいになりました。

鍵盤ハーモニカ、尺八、口琴の他にコンツォフカ(チェコスロバキア)、レインステイツク(アマゾン先住民)、スリットドラム(アジア、アフリカ)などの民族楽器が次々に演奏され、様々な楽器の音色を楽し

しむことが出ました。吹いたり打ったり振ったりして演奏され、数えたら実に38の楽器が登場しました。

また、荒城の月、浜辺の歌、アメイジング・グレイスなどのなじみの曲を、お二人の即興でお聞きしました。調子や呼吸がぴったり合い、美しい音色のハーモニカを奏でいただきました。

おじいさん、おばあさんも含め参加された方々が、様々な音色とその響きに浸った楽しいひと時でした。



即興でも息の合った演奏

短歌

竹島とみ子(広小路)

墓参りに行けば亡夫によく似たる丸き目玉の蛙待ちおり

我輩は猫であるとう顔をして太りたる猫の庭を横ぎる

松の枝に昼寝している野良猫の背の長き毛が風にそよぎぬ

介護士の胸のふくらみゆたかにてBカップと聞けばCカップと笑む

バー様がたまにババーになるけれどこの家に私の心やすらぐ

毎月第3日曜日は 家族ふれあう

「家庭の日」

声 一 球 懸 命



上片桐少年野球クラブ

助監督 米村 学

上片桐少年野球クラブは、この「一球懸命」をチームスローガンに掲げ活動を行ってきましたが、部員数の減少によりチームとしての活動が困難となり、36年の歴史に幕を閉じる事となりました。

私が指導者の話をいただいたのが4年前。当時これといって地元で貢献した活動をしていなかっただけは、ようやく恩返しできると思いい、かつて自分も所属していたこのチームのお

世話になる事を決めました。子ども達と共に駆け抜けたこの4年間。指導者という立場でありながら、逆に沢山の喜びや感動を子ども達からもらいました。私にとって子ども達一人一人が大切な存在であり宝物です。このチームで野球ができた事、貴重な経験をたくさんさせていただいた事、本当に良い思い出になりました。

今年度より、子ども達と共に松川少年野球クラブの一員となります。子ども達が野球を継続できる環境を与えていただき、た事に感謝し、微力ながらこれ

世話になる事を決めました。

子ども達と共に駆け抜けた

この4年間。指導者という立場

でありながら、逆に沢山の喜び

や感動を子ども達からもらい

ました。私にとって子ども達一

人一人が大切な存在であり宝

物です。このチームで野球がで

きた事、貴重な経験をたくさん

させていただいた事、本当に良

い思い出になりました。

今年度より、子ども達と共に

松川少年野球クラブの一員とな

ります。子ども達が野球を継続

できる環境を与えていただき、

た事に感謝し、微力ながらこれ



まちの石仏③ 「如意輪観音」(円通庵)



如意宝珠と輪宝で、人々に財宝や衣服飲食を与え、病苦を除き、衆生の迷いを破るといわれている。



上片桐少年野球クラブ

熊谷 貴浩

からも、子ども達に少年野球の楽しさとすばらしさを伝えていきたいと思えます。

とうとうこの三月で休部という事になりました。昭和53年からあつという間に36年間という月日がたちました。

前年度より引き継がれました「一球懸命」というテーマで、6年生8名、5年生3名、3年生3名、2年生2名、計16名で活動を行ってまいりました。

今年度の大会は12大会中優勝2回、準優勝2回、3位3回と大変素晴らしい成績を残す事ができました。勝利する事で、子ども達も新入クラブ員が入ってくれるのではないかと、期待しながら頑張ってきました。

又、ある保護者の方からも「〇〇君入りするから声かけてみませぬ。」というお言葉も、自身の子どもを小学校校庭や町営グラウンドへ連れて行き、野球の練習をしました。その中で遊びに来ている子ども達に野球の楽しさを伝える為、バッテリーやミニゲーム的な事をし、勧誘活動を行ってまいりました。しかし、クラブ員を増やす事ができませんでした。26年度を終え、人数不足で1チームを作る事が出来ず松川少年野球クラブさんと合併する事となりました。最後に、またいつか町営グラウンドで上片桐の子ども達が元氣よく野球をする姿を見られる日が来る事を願っています。

2022年

母が認知症を発症しました。何年前か前に脳梗塞になり、その後は落ちついていったと思っていたのですが...

実際は、年に何回か顔を見るだけで、ほとんどお嫁さんにお任せしっぱなし。

すぐ近くに嫁ぎ、いつでも会えると思っていたため、満足に会うことも理解することも怠り大丈夫だろうと気楽に考えていました。

ある日、親戚数人と実家でお茶を飲んでいた時の事。

ニコニコ笑いながらの母のひとことが...

「ここにおける若い頃の私によく似たおまえさんは誰な、知ってる人？」

このひと言は、みんなの笑い話になりました。言われた私も格別なショックも受けず苦笑い。

この時から比べて今の母の様子は天と地ほどの違いが出てしまいました。

笑顔は無し、大きな声を出す、気に入らないと怒鳴る、など。相手に対して怒るのは女性に多いとされる。怒鳴るというより罵声を浴びせる。に近い人もいろいろ言いたい事も言えず我慢してきた事のあらわれなのでしょう。

キツチリした性格の母は、人に対する要求も大きく叶わない時の我慢も多かったことだろうと想像しました。

施設を訪れるのは辛いと感じるけれど、母の現実から目を逸らさず見守っていかうと思えます。

(宮下和子)

公民館報

「まつかわ」

第 618 号

平成27年 4月15日

発行所 松川町公民館

責任者 矢 澤 登

編集人 公民館編集部

Tel 36-2622

e-mail: c.kouminkan@matsukawa-town.jp

飯田市上郷黒田121

印刷所 龍共印刷(株)

再生紙を使用しています。